

# 中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生

## —前編—

永田小絵

獨協大学外国語学部言語文化学科

### 1. 中国文学\*1と小説 —序にかえて—

歴史的に見ると、中国文学の萌芽は『詩経』にまで遡る。『詩経』は今からおよそ 2500 年から 3000 年前に民間に流布していた歌謡などを集めた詩集で、はじめ三千首ともいわれる詩歌を集めたものであったが、紀元前六～五世紀ごろに孔子が三百首あまりに整理編纂したとされる。後の経・史書等において「詩」と言えば『詩経』を指すほどの中国文学の代表作品である。『詩経』は四字句の連続を基本とする古体詩で、後に「絶句」(四句)、「律詩」(八句)など近体詩が現れた。このように、中国で文学と言えば伝統的に詩\*2、辞・賦\*3、詞\*4、曲\*5 などの韻律詩を指していた。詩の歴史は歌謡、朗詠、歌劇と密接に結びついて発達してきたが、王羲之\*6の『蘭亭序』にも見られるように\*7、詩作は音楽とともに知識人のたしなみでもあった。これらの中国の古体詩および近体詩は我が国に伝わり、当初は中国音で直接読むことを通じて、後に訓読という独自の翻訳法を通じて、日本文学に深く浸透していった。『古今和歌集』には邦人の手になる漢詩・漢文が多く収録され、また中古文学において三大随筆と並べ称せられる鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』、清少納言の『枕草子』にも漢詩・漢文が当時の日本文学において重要な位置を占めていたことがうかがえる。

一方、中国において文学作品としての小説\*8は異民族(モンゴル族)によって支配された元代になるまでほとんど顧みられることがなかった。俗説には、元代には異民族であるモンゴル族に支配された漢族知識人が不満を発散するための手慰みとして小説を書き始めたという。十三世紀から十七世紀(元代から清代初期)に発表された散文形式の小説に「四大名著」\*9として有名な『三国演义』、『紅樓夢』、『水滸伝』、『西遊記』がある。四大名著に代表される中国小説は歴史、説話、伝承を物語の形式にまとめたもので、主に歴史演義、英侠伝奇、神鬼魔怪、人情世事を題材としている。識字率の低かった当時においては庶民の娯楽として講談や演劇が盛んに行われ、小説も講談(評書)や演劇(京劇や越劇などを含む中国各地の地方劇)と密接な結びつきがあった。そのため、「白話文」(口語文)を用い、一話読み切りの「章回小説」\*10の形式に則って書かれるという特徴を有している。

中国の章回小説は我が国にも伝わって江戸期の文学や演劇に大きな影響を与えた。湖南文山の『通俗三国志』、岡島冠山の『忠義水滸伝』、口木山人の『通俗西遊記』が生まれた。さらに、中国文学の伝統は現代に至ってもなお継承され、数々の翻案小説\*11、アニメや漫画\*12の題材と

なっている。一方、『聊齋誌異』を代表とする民間に伝わる怪談および伝説を典拠とする説話集と物語は「志怪小説」、「伝奇小説」と呼ばれるジャンルを形成した。日本文学との関連においては、江戸期の上田秋成の『雨月物語』、曲亭(滝澤)馬琴の『南総里見八犬伝』などにその影響が色濃く見られるほか、『白蛇伝』は安珍・清姫の道成寺伝説に姿を変えて歌舞伎の演目『娘道成寺』として人気を博した。後世にも芥川龍之介の『杜子春』、『仙人』、中島敦の『山月記』、『李陵』など、中国の伝奇小説を下敷きにした小説が発表された。

このように我が国の文学・芸術に大きな影響を与えた中国小説であるが、本国において小説が文学の一ジャンルとしての市民権を得るまでには実に 800 年近くの歳月が費やされた。しかも中国独自の発展を遂げた章回小説は畢竟「大雅の堂に登らず」、文人が本名を隠して余暇の戯れに手がけるものであり、あくまでも庶民の娯楽としての地位を与えられるのみであった。小説が知識人に注目され、その価値を認められるようになるには「外国小説の翻訳」という過程を経る必要があった。外国小説は、最初は伝統的な章回小説に書き換えられ古文の伝統に則った形式で翻訳されたが、ほどなくして口語の散文による近代小説の形式をとるようになる。これが清朝末期から民国初期にかけての中国の「第三次翻訳ブーム」である。この時になってようやく中国人翻訳者が誕生する。

「母語と第二言語を解し、独力で翻訳が可能であるという条件を満たす」近代翻訳者は、清朝末期から民国に至る歴史的転換期の中でいかにして誕生したのだろうか。また、古来より一方的な文化輸出の対象であった日本から中国へ伝播した小説は中国の近代翻訳者にいかなる影響を与えたのであろうか。本論は、中国清朝末期の外国小説翻訳ブームに着目し、中国における近代翻訳者が誕生した経緯を日本との文学交流史をも交えて探ることを目的とするものである。

## 2. 三回の翻訳ブーム —外国人翻訳者から日本人翻訳者へ—

上述のように、中国の近代翻訳者が本格的に活躍するようになったのは、清代末期から民国初期にかけての時期である。しかし、それまで中国域内で翻訳活動が全く行われていなかったわけではない。ここで中国の「三回の翻訳ブーム」について紹介しよう。

### 2.1 口述翻訳のはじまり —第一次翻訳ブーム・仏典翻訳—

中国における第一次翻訳ブームは後漢(紀元二世紀)に始まり隋唐時代(紀元八世紀末頃)まで続いた仏典翻訳である。西暦 220 年の後漢滅亡後、『三国演義』に描かれた魏・呉・蜀の覇権争いに突入する。この戦いに端を発した群雄割拠の動乱期を経て、天下は隋の文帝によって西暦 589 年に統一され、つかの間の安定を取り戻したが、618 年の失政によって農民反乱を招き滅亡した。隋にかわって天下をとった唐(618-907 年)は当時世界最大の国際都市であった首都・長安を建設し、約三百年にわたって栄えた。

「唐詩」の言葉が示すように中国文学の精髓ともいえる詩は唐時代に最高の境地に至っている。唐代は仏典翻訳が史上もっとも盛んになった時期である。仏典は外国人翻訳僧が仏典を見なが

ら漢語で翻訳口述し、それを中国人学問僧が書き留める方式を採って翻訳された。唐朝廷が仏教を保護したことから、この時期に翻訳された仏典はおびただしい数にのぼる。隋唐帝国時代の仏典翻訳は中国に仏教と印度哲学をもたらし、さらに日本から派遣された遣隋使・遣唐使を通じて長安の都から「唐詩」と「仏典」が我が国に導入されて文化と文学に大きな影響を及ぼした。

唐はやがて安史の乱(755年、安祿山・史思明の乱)から徐々に滅亡へ向かい、黄巢の乱(875-884年)を機に中国は再び分裂状態に陥った。その後、モンゴル族が国の弱体化につけ込んで襲来し、チンギス・ハーンの孫フビライ・ハーンが中国を支配し元王朝を建てた。全盛期の版図は中央アジア、ロシア方面にまで及び、外交はモンゴル族に掌握されたため、外国の書籍の中国語への翻訳は一時断絶することになったが、この時期に国内に本格的な小説が生まれたことは前述したとおりである。元王朝も紅巾の乱によって1368年に滅び、元にとってかわった明朝はその後1644年に李自成の反乱に乗じて北京に入城した満州族の清国建国によって滅ぶまで約二百七十年にわたって中国を支配した。後に続く清朝も明朝とほぼ同じく約二百七十年続き、とりわけ清は史上最大の領土を持つ大国となった。対外交流においては、明代に鄭和艦隊の大西征があり、十五世紀から始まったヨーロッパの大航海時代到来とも相まって東西交流が盛んになり、宗教改革によってヨーロッパ以外の地域に布教することを目指すようになった宣教師が中国や日本に渡来することとなった。清代には茶葉や織物、陶磁器などの物産がヨーロッパに輸出されて清朝に大量の銀をもたらした。明・清の544年間に中国は唐代に匹敵する隆盛を実現したのである。

## 2.2 口述翻訳のシステム化 —第二次翻訳ブーム・宣教師による実学の翻訳—

こうした状況のもと、明朝後期から清朝(十七～十八世紀)にかけて第二次翻訳ブームが起こった。欧米から中国に渡った宣教師は西側の進んだ科学技術文明を中国に持ち込んで中国経済の発展を促すとともに近代資本主義の萌芽をもたらした。清朝歴代の皇帝は西洋の天文学(暦学)、軍事技術、幾何学、物理学、農学などの実学を珍重し、宣教師を積極的に登用して実学書の翻訳に当たさせたが、西洋の社会学、哲学、文学、宗教などに対してはほとんど期待や興味を持たなかった。清代には1865年設立の江南製造総局をはじめとする官立の翻訳館が各地に設置され、翻訳と印刷出版が行われるようになった。朝廷はヨーロッパから様々な実学書を輸入し、翻訳館で西洋人宣教師に口述翻訳させたものを中国人学者にまとめさせ、それを整理編纂する方法を採用した。宣教師による実学書の翻訳はいわば国家事業の一環として正式に組み込まれ、システム化されたと言ってよいだろう。当時の翻訳事情に関しては、「中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷」(永田2006)に詳しい。

西洋人宣教師は朝廷の求めに応じて大量の技術書を翻訳したが、文学や宗教書を翻訳することはほとんどできなかった。また、キリスト教の布教に際してもイエスを孔子になぞらえたり、信徒が中国の民間信仰の神を祀ることを黙認したりするなど、中国の習慣に合わせることで皇帝と朝廷に取り入った。中国におけるキリスト教布教の状況は、日本におけるキリシタン大名の出現や豊臣秀吉の伴天連追放令およびキリシタン弾圧という一連の流れとは趣を異にし、中国朝廷は西洋人宣教師の存在やキリスト教布教について非常に無防備であった。そもそも多くの民族を抱え、

自身も異民族として中国を支配することとなった清朝にとって、西洋人宣教師も国内少数民族とさほど変わらない存在であったのだろう。宣教師を登用するに際しても自国の経済・技術の発展のために仕える士大夫として扱っている。中国はそもそも異民族による政権奪取の歴史を経てきたこともあり、(西洋人を含む)異民族をたやすく受け入れるが、最終的には相手を中華文化の中に呑み込んでしまう。中華文化を身につけた者はひとしなみに中国人として扱われ、生まれによって差別されない。「文化」という言葉は「文」(人が後天的に身につける素養)によって「化」(洗練し教化する)ことを意味し、人はそれぞれ異なる「文」を身につけることによって異なる人(異民族)となるのであって、出自や血統はその人のアイデンティティを決定づけるものではないと考える(この点は日本のあくまでも外国人を邦人と分け隔てる国民性と非常に異なっている)。したがって、中国語を流暢に読み書きし、中国服を着た西洋人宣教師は西洋の言語を解するという特長を持ってはいても、すでに中華社会の一分子であると見なされていた感がある。しかし、宣教師にしてみれば、皇帝どころか、各地の封建君主や民間への布教もままならず、一部に信徒を獲得することはできたものの広く普及させるまでには至らず、ただ朝廷に利用されるだけで、生活習慣や言語、そして信仰さえも中国風にせざるを得ないフラストレーションを感じていたに違いない。これが後に西欧列強の中国進出に大きな役割を果たすことになるのだが、古来より朝貢外交しか経験したことのない清朝は西洋との折衝において自国の翻訳・通訳者を育てる必要性を意識しなかった。当時の中国社会では西欧言語と中国語間の翻訳・通訳は全て西洋人宣教師が行い、中国人翻通訳者不在の状況のなかで宣教師は自国の利益のために故意に誤訳を行ったり、祖国に清朝の国家機密を報告したりと、通訳者の職務範囲を越えて外交の裏舞台で暗躍しはじめることになる。

### 2.3 本国人による翻訳の始まり —第三次翻訳ブーム前期—

第三次翻訳ブームは欧米列強の進出に伴う国家存亡の危機の中で起こった。清朝末期の知識人たちは欧米との外交交渉における翻訳や通訳を全て西洋人宣教師に頼らざるを得ない状況を危ぶみ、朝廷に自国での外国語教育と翻通訳者の養成を行うよう進言し、中国各地に官営外国語学校を設立することが許可された。これらの外国語学校を卒業し、留学から帰国したエリートたちが持ち帰った外国小説が中国人文人の協力を得て翻訳されることになったのが第三次翻訳ブームの前期段階である。

前期の翻訳は伝統的な方法、すなわち外国語と中国語に通じた者が原書を翻訳口述し、それを文人が書き留めて編集潤色する方式を採った。過去二回の翻訳ブームと異なる点は、口述翻訳をする側も文章にまとめる側も中国人であったことである。だが、なぜ帰国留学生が自ら筆を取って翻訳にあたらなかったのであろうか。かつては完璧な中国文を書くことが困難な外国人翻通訳者に頼っていたため、リライトする必要があったことは理解できる。清朝末期の外国小説翻訳でもこのような役割分担がなされなければならなかった理由は当時の中国語の言文乖離にある。文学作品は散文とはいえ中国文学(とりわけ詩文)の伝統にのっとり美文である必要があった。欧米に派遣された留学生は自然科学と技術の学習を目的としていたため、文学的素養の深い文人の筆に頼らなければ格調高い文学作品としての翻訳を行うことができなかった。次に、この時期に最

も活躍した「翻訳者」である林紘の作風について見てみよう。

### 3. 中国古典文学に同化された外国小説 — 林紘の翻訳 —

『晚清戯曲小説目』によると、清朝末期の翻訳小説は 662 作品であった。もともと活躍した翻訳家は林紘(1852—1924)である。十九世紀末から二十世紀初めの中国では彼の翻訳小説が全国的に流行していた。林紘は中国ではじめてシェークスピア、ディケンズ、スコット、ユーゴー、バルザック、大デュマ、小デュマ、ストウ夫人の作品を紹介した人物である。中国の古典小説に倣った文体で西洋小説を翻訳した第一人者といつてよい。文章は洗練され、叙情叙景ともに味わい深く完成度の高いものとなっている。

林紘はまた、中国人翻訳家として初めて欧米の小説を中国語に翻訳した人物として知られている(林紘以前に外国人宣教師による宗教小説あるいは詩の翻訳はあった)。林紘は1898年から1924年までの二十年あまりにわたって180作あまりの外国文学作品を翻訳しているが、彼自身は外国語を解さなかったため、すべて口頭翻訳されたものを筆記し、潤色するという形式をとっていた。この翻訳方式は前述したように仏典翻訳以来の中国の伝統を踏襲したものである。

林紘の翻訳第一作目はアレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas fils, 1824年7月27日 - 1895年11月27日)の『椿姫』(La Dame aux camélias)、第二作目はアメリカ合衆国のハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe, 1811年6月14日 - 1896年7月1日)の『アンクル・トムの小屋』(Uncle Tom's Cabin)であった。著名な文化人であった林紘は本来であれば小説(当時の文学界では非常に低い地位にあった分野)の、しかも翻訳などには決して手を染めないはずであった。翻訳を行った契機に関して有力な説は「憂さ晴らし」のため、というものである。当時、46歳の林紘は妻を亡くしたばかりでふさぎ込んでいた。ある日、フランス帰りの友人である王子仁が林紘を招いて「フランスの小説には非常に良いものがある。特にデュマ父子はパリで最も名の知れた小説家だ。これを一緒に訳してみようではないか」と言う(林紘《巴黎明茶花女遺事》引より)。林紘は妻を失った悲しみを紛らわすために引き受けたようだ。林紘の翻訳作品第一作が福州で出版されると、読者の反応は予想外に大きく、彼の『椿姫』は瞬く間に全国的な売れ行きをしめし、さらに国内の多くの作家の目にもとまって好意的な書評が続々と発表された。これは最初の動機が何であったにせよ、林紘にとっては非常に大きな喜びをもたらしてくれた。そこで第二作目の『アンクル・トムの小屋』は林紘自ら提案して魏易に口述翻訳の協力をあおいだ。この小説の内容は、ちょうど八カ国連合軍の攻撃や海外に移民した中国人労働者への差別・排斥などの社会情勢を受け、多くの読者の共感を得るところとなった。こうして林紘は次々に外国作品を翻訳するようになる。その作品数は一説に184冊、他に179冊、183冊としている資料もある。林紘と協力して外国作品の口述翻訳をした「通訳者」はわかっているだけで19人に上る。翻訳作品には欧米の小説以外に、日本の『不如帰』(徳富蘆花著)も含まれている。1905年から1911年にかけては、ロシア語の作品が多く翻訳された。主にスラブ系民族が受けた迫害をテーマにしたもので、主な原作者にはプーシキン、ミハイル・レールモントフ、トルストイ、チャーホフ、ゴーリキーなどが見られる。

林紘の翻訳が流行した理由の一つに、その文章の美しさがあったという。翻訳を行う際には、原著の外国語を解する友人(口述者)がまず林紘(編訳者)に口頭で内容を話して聞かせる。編

訳者は原語の表現や文法などの表面的な形式に縛られず、小説の内容をダイレクトにとらえ、それを自らの文才によって美文に仕立て上げることができる。そのため、林紘の翻訳には外国臭さが薄く、当時の人々にとって容易に受け入れられる作品となった。しかし、原著はあくまでも小説であり、物語の内容もどちらかといえば通俗的である。林紘は清朝末期の科挙に合格した挙人（合格者のうち上から三番目のランク）で、経・史・詩書の全てに通じていた。文章を書く時には一語一句に來歴と典拠があることが必要とされた当時の文人として、翻訳に際して外国小説の諧謔と通俗を古文の典雅に置き換えた文体を採用している。梁啓超は『清代學術概論』で「林紘が翻訳した小説はほとんどが欧米の二流か三流の作家のものだが非常に流行した」と述べ、康有為をして「翻訳といえば嚴復と林紘を挙げなければならない」と言わしめた。しかし、この二人の評論に対して林紘は不満を抱いた。それは「文学作品を實用書と比較された」こと、「文章の美しさに触れていない」ことが理由であったようだ。

林紘の翻訳は非常に歓迎され、ベストセラーとなった。その一方で、その古典的な文体ゆえに当時のオピニオンリーダーとして学术界・思想界を牽引した知識人は彼の翻訳に両手を挙げて賞賛したわけではなかった。胡適は『五十年來中國之文學』で林紘の翻訳について、外国の思想を過度に中国化してしまったことを「最終的には失敗である」としながらも、以下のように述べてある程度の評価を与えている。

「林紘が古文で小説を翻訳した試みは成功したというべきだろう。古文はかつて長編小説に用いられたことは一度もなかったが、林紘は古文で多くの小説を書き、それを模倣した者も少なくない。外国小説の翻訳は古文にそれまでなかった諧謔味すら与える結果となったし、さらに叙情に乏しかった古文で『椿姫』や『ジョーン・ヘイスト』\*13 を翻訳したのだ。古文の応用としては司馬遷以來の成果だ」

胡適の指摘したように、林紘は白話文學運動（口語文學を提唱する言文一致運動）に反対の立場を保ち続け、一貫して古文を用いて翻訳を行ったとはいえ、彼の翻訳はそれまでの古文にはない新しい可能性の芽を秘めていた。外国小説を伝統的な古文に完全に同化することはできず、林紘の翻訳は中国の古文に新たな息吹を与える結果にもつながったのである。そして、若き日に林紘の小説を読んだ魯迅・周作人兄弟や梁啓超ら、後の時代の近代文學を担うことになる文學者たちに大きな影響と示唆を与えたのである。もし、この時代に林紘の翻訳小説が現れなければ、中国の知識人が外国小説にこれほどの興味を抱くこともなく、自ら翻訳をしようとも考えなかったであろう。錢鐘書は「林紘の翻訳」（1968年）と題する評論で概略次のように述べている。

「林紘の翻訳には誤訳や訳漏れが少なくないが、後になって見直してみると再読にたえる価値があることがわかった。ハガードの作品などは原作よりも林紘の翻訳のほうが優れているほどだ。林紘の翻訳が「媒介」の役目を果たしたことは文學史上広く認められた事実である。私自身も彼の翻訳小説を読んで外国小説に興味を持つようになった。商務印書館発行の『林訳小説叢書』は、私が十一、二歳の頃の大発見とっていい。彼の小説は私を新しい世界にいざなってくれた。それは『水滸』、『西遊記』、『聊齋誌異』以外の、別の世界を開いてくれ

た」。

林紵の後、新しい時代の新しい翻訳は魯迅、周作人によって中国にもたらされることになる。

#### 4. 白話(口語)文学と翻訳 — 梁啓超、魯迅・周作人の翻訳と近代翻訳者の誕生 —

美文による翻訳の伝統は中国の民族自決を目指す洋務運動、五四運動\*14の流れの中で徐々に変化を遂げることになる。胡適は『文学改良趨議』(1917年)で白話文学を提唱して次のようなスローガンを掲げている\*15。全て林紵の依って立った古文の筆法に反対する意思表示となっている点に注目したい。

- 1 内容のあることを書く
- 2 古人を模倣しない
- 3 文法に気をつける
- 4 病気でもないのにうめかない
- 5 なるべく陳腐な常套句を使わない
- 6 典故を使わない
- 7 対句にこらない
- 8 俗字俗語を避けない

胡適は1910年、20歳のときに官費でアメリカに留学し、コーネル大学とコロンビア大学で農学、哲学、文学を修めて帰国し、26歳の若さで北京大学の教授となった秀才である。彼は白話文学を「活きた言葉による活きた文学」と位置づけ、口語文による翻訳を実践している。

梁啓超(1873-1929)は林紵(1852-1924)とほぼ同じ時代に生きた学者で、彼も白話文と新文学を提唱し、小説による社会改革を目指した。彼は1902年に東京で雑誌『新小説』を創刊し、多くの翻訳小説を掲載している。彼は「かつて欧州各国の変革期には碩学・人徳の士が胸中に抱く政治的意見を小説に寄せて世に問うたものである。小説は幅広い読者に読まれ世論を形成することができる」(『譯印政治小説序』1898年)、「一国の民を新しくするためには一国の小説を新しくしなければならない。新たな道徳を望むなら、小説の刷新が必要である。学芸の刷新は小説の刷新を必要とする。新しい人心、新しい人格も新しい小説から生まれる」(『論小説與群治之關係』1902年)と述べている。彼がここで述べている「政治小説」とは当時の日本で流行していた一連の新形式の小説をさしている。日本滞在中に自らも矢野龍溪の『経国美談』を翻訳するなど、多くの翻訳を手がけた。

一方、林紵の筆による翻訳小説を読んで育った魯迅らは、日本滞在中に、わが国明治期の翻訳ブームのなかで多くの翻訳書に触れることができた。帰国後、魯迅らが言文一致・口語による翻訳を主張して翻訳作品を発表し始めたとき、中国に初めて近代翻訳者が生まれたのである。第三次翻訳ブームが中国にもたらしたものは、明末清初の実学とは異なり、思想・文化・文学における異文化の衝撃と、詩歌・散文・小説の新しい文体であった。明治期の翻訳文学が漢文脈にかわる日本語の新しい文体—欧文脈—を形成したように、中国語も翻訳小説を通じて欧米諸語の代名

詞、関係詞、時制などの概念を表すための表現を発明し言語のフロンティアを拡大していった。

周樹人(魯迅)、周作人兄弟の翻訳への貢献は非常に大きい。魯迅はジュール・ベルヌの『月世界旅行』『地底旅行』、ユーゴーの『レ・ミゼラブル』の一部を訳し、さらに周作人と共訳で『域外小説集』を出している。同時期に多くの海外探偵小説が出回り、近代翻訳小説の市場は未曾有の活況を呈した。翻訳小説は、中国人がそれまで抱いていた小説への軽視を一変させ、中国文学が外国文学に学ぶ窓口ともなった。外国作品は清朝末期の小説の創作と描写に影響を与え、宋、元の時代から続いてきた伝統的な「章回小説」の形式がようやく打ち破られることとなった。(本稿は後編に続く)

---

## 後編

5. 文言小説から白話小説にいたる文体の変化
6. 魯迅・周作人の『域外小説集』
7. 明治・大正期における日本語から中国語への重訳
8. 近代翻訳者と翻訳の標準
9. まとめ

---

## 注

- 1 中国における「文学」の概念は講義では文化全般を指す語であるが、ここでは狭義の文学(創作作品としての文学)という意味で用いる。
- 2 『詩経』など古体詩、『唐詩三百首』に納められた絶句や律詩などに代表される近体詩。いずれも歌うことが本来の目的
- 3 屈原の『楚辞』が代表的、主に朗読が目的
- 4 宋代に流行した歌曲用の歌詞
- 5 元代に流行した歌謡文芸や演劇、とくに歌劇のために創作された詞
- 6 四世紀頃の政治家、書道家。「書聖」と称される。
- 7 永和九年三月三日、王羲之ら当時の宮廷に使える役人たちが蘭亭において曲水の宴を開き、水に浮かべた杯が自分の目の前に来るまでに詩を作るという遊びを行った。その時の詩集の序文として書かれたのが『蘭亭序』である。現在でも書を学ぶ者の手本(法帖)として広く用いられている。
- 8 「小説」という語自体は早くも紀元一世紀の『漢書・芸文志』に見られるが、文学作品としての小説ではなく、「取るに足らぬ言説」を指す語である。
- 9 日本では『紅樓夢』のかわりに『金瓶梅』を入れて「四大奇書」と称するが、中国では本文にあげた四作品と「四大名著」と呼ぶのが一般的である。
- 10 長編小説であるが連続ドラマのように一話一話が完結する形式を取った小説のこと。一話を一回と数える。冒頭にその回のタイトルと内容を凝縮した短い文または文章を掲げる。各回の最後には「続きは後ほど、ご期待あれ」などの文句が入ることからも講談本としての性格がうかがい知れる。京劇などではこの一話を独立させて一幕物として演じる。三国演義や水滸伝は全百二十話からなっている。外国

小説も最初のうちは章回小説の形式で翻訳されていた。

11 古くは吉川英治の『三国志』、新しいものに北方謙三の『水滸伝』など。

12 アニメに東映動画が『白蛇伝』(1958年、演出・藪下泰司、国産初の"天然色長篇漫画映画")や『西遊記』(1960年、演出・藪下泰司、手塚治虫、白川大作)、漫画に横山光輝の『三国志』および『水滸伝』、手塚治虫の『ぼくの孫悟空』、諸星大二郎の『西遊妖猿伝』などがある。

13 『ジョーン・ヘイスト』(Joan Haste, 1895)は、イギリスのハガード(H. R. Haggard, 1856-1926)の小説。

14 五四運動(ごしうんどう)は1919年5月-6月に中国で起こった反日・反帝国主義の独立運動。

15 『漢字圏の近代』P.94より引用

---

著者紹介：永田小絵 (NAGATA, Sae) 獨協大学外国語学部言語文化学科専任講師。専門は中国語通訳・翻訳。最近の論文に「獨協大学外国語学部言語文化学科の中国語教育における通訳訓練法の応用」(獨協大学「外国語教育研究代24号」)、「中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷」(『通訳研究』7号)がある。

連絡先：snagata@dokkyo.ac.jp

---

## 参考文献

### 中国語書籍(著者名アルファベット順)

《中國翻譯辭典》湖北教育出版社, 1997年

陳福康《中國譯學理論史稿》上海外語教育出版社, 2000年

鄧紹基主編《中國文學通典—小説通典》解放軍文藝出版社, 1999年

郭延禮《中國近代翻譯文學概論》湖北教育出版社, 1998年

孔慧怡、楊承淑編《亞洲翻譯傳統與現代動向》北京大學出版社, 2000年

孔慧怡《翻譯・文學・文化》北京大學出版社, 1999年

劉靖之主編《翻譯新焦點》商務印書館, 2003年

黎難秋主編《中國口譯史》青島出版社, 2002年

羅選民主編《外國文學翻譯在中國》安徽文藝出版社, 2003年

馬祖毅《中國翻譯簡史 "五四"以前部分》中國對外翻譯出版公司, 1998年

馬祖毅、任榮珍《漢藉外譯史》湖北教育出版社, 2003年

馬祖毅《中國翻譯史》上卷 湖北教育出版社, 1998年

楊聯芬《晚清至五四:中國文學現代性的發生》北京大學出版社, 2003年

朱純深《翻譯探微》書林出版有限公司, 2001年

鄒振環《20世紀上海翻譯出版與文化變遷》廣西教育出版社, 2000年

### 日本語書籍(著者名五十音順)

入江曜子(2006)『溥儀』岩波書店

内田慶市(2001)『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部

- 何群雄 (2000) 『中国語文法学事始』 三元社
- 斉藤希史 (2005) 『漢文脈の近代』 名古屋大学出版会
- 沢本香子 (1998) 「本格的翻訳文学研究の出現—郭延礼『中国近代翻訳文学概論』について」『清末小説研究』第21号発行記念大探索号
- 田中彰 (2003) 『明治維新と西洋文明』 岩波書店
- 寺田隆信 (1997) 『物語 中国の歴史』 中央公論新社
- 永田小絵 (1997) 「「信達雅」をめぐる中国近代の翻訳論」『通訳理論研究』12号
- 永田小絵 (2003) 「翻訳を論ず—林語堂の翻訳論」『マテシス・ユニヴェルサリス』(獨協大学言語文化学科紀要)第五巻第一号
- 永田小絵 (2006) 「中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷」『通訳研究』7号
- 村田雄二郎、C・ラマール編 (2005) 『漢字圏の近代』 東京大学出版会
- 劉建雲 (2005) 『中国人の日本語学習史』 学術出版会